

寝 て い る 蛇

小さな遊びの中で

一人一人に応じるということ

豊田 一秀

一人の女兒が家で教わったのでしょうか、長縄跳びをしたいと言うので、縄の片方を木に結びつけて、私は反対の片方を持って始めます。まだ回転する縄は跳べないらしく、ゆっくりと波のように揺らして欲しいと言います。その位の揺らし方でもまだうまくは跳べません。「蛇が揺れているみたいだ」などと言いながら私と二人で遊んでいると、興味を持った子どもが二、三人見に来ます。その子どもたちは長縄跳びが初めてらしく、「揺れている蛇」さえもうまくは跳べません。そこで、私は縄を揺らすことを止

めて、地面に伸ばすと「寝ている蛇です」といいます。子どもたちは止まっている縄をピョンと飛びながら、自分達が行ったり来たりすることを楽しんでいました。「蛇（縄）を踏みつけると蛇が起きてしまう」などと私が言うので、子ども達はスリルを味わいつつ注意しながら跳んでいます。その内に、子どもは五、六人増えていきます。一人の子どもが「起きています蛇」をやって欲しいと言うので、私は「病気の蛇です」と言って縄をゆっくりと動かします。子どもたちは、起きだした蛇を踏まないようにしながらも面白そうに跳んでいます。その内に縄の動かし方が激しくなる毎に、「元氣な蛇」「踊っている蛇」「怒っている蛇」などが発明されます。

こうしていろいろな縄の動かし方が工夫されていき、一人一人の子どもは自分が跳ぶ前に「くくしている蛇をやって」と、自分の技量にあった縄の揺らし方を私に注文し、それを跳ぶことを楽しんでいきます。

そのうちに年長児も見にやって来て、「大波小波」や「郵便屋さん落とし物」のようなもつと難しい跳び方も注文の中に入ります。「寝ている蛇」と「郵便屋さん落とし物」では技術的に大きな差があるのですが、皆、堂々と自分に合った跳び方を私に注文します。

できる子どもが自慢したり、できない子どもを馬鹿にしたりすることなく、また、できない子どもが恥ずかしそうにすることもなく、皆が自分の技量に合った跳び方を楽し

んだ和やかなひと時でした。

私はこの頃、子どもが友達と和やかに遊ぶのが以前より難しくなっているような気がします。子どもたちは、本人が自信を持っていることは自慢気に行いますが、その反対に、自信のないことは避けようとする傾向があるようです。人から評価されることが多くなったのでしょうか、自分がその事をできるかできないかが気になり、また友達がどうなのかが気になってしまふのです。

ちょうどそれは、小学校などでの体育の時間に、跳び箱の得意な子どもは喜々として誇らし気に行い、不得意の子はその時間が憂鬱になるというあのパターンに似ています。できる子の自信も、そしてできない子の自信のなさも、その課題をこなせているかどうかという同じ価値観に縛られた自己評価であることに注意しなければなりません。

いわゆる教科教育においては、前もって教師の価値に従ってカリキュラムを作ること、そしてそれを課題として子どもに与えることはごく普通に行われていることでしょ。技能の習得と、それに伴う達成感を体験させることに主眼においた場合、それは効率的な指導方法と言えましょう。その中では、友達と競い合うことも学習への動機付けとして用いられます。しかし、遊びは教科ではありません。人から与えられた課題よりはむしろ自分の心に湧き起こった興味を、人からの評価よりも自己満足、結果よりは

過程を、それぞれ大切に考えるのが遊びです。

この日の長縄跳びがなぜ技能の差を越えてみんなで楽しめたのでしょうか。いくつかの要素を考えてみたいと思います。

第一には、参加した皆がその遊びに興味をもって、自らの意思で遊びに入っていたという前提を思い起こすことが大切です。(参加しなくてもよい自由も当然あるのです。)

第二に、技術的には差があっても、自分は跳べるといふ喜びと自信に関しては皆同じであったからではないでしょうか。第三として、跳び方を子どもが選べることで、子どもが自分の技量を友達と比較したり、教師に評価されたりする必要がなかったからではないかと思えます。保育者の出す課題に子どもが応えるのではなく、その反対に、子ども一人一人の技量に従った様々の要求(この場合は縄の揺らし方)に保育者が応えることで、子どもがその遊びを課題として感じる必要がなかったのだと思えます。

子どもは本来穏やかなものだとは考えます。自分にゆとりがあり、自分を信頼できているならば、人と自分を比べて人や自分を責めたり、自分を守ったりする必要もないでしょう。その意味でも幼稚園に於て保育者は、一人一人の子どもがそれぞれの心と身体の育ちに従って生活できるように配慮することが大切です。このことを言い換えるならば、子どもが自己信頼感を持てるように援助することが、幼稚園の大きな役割であると言ってもよいかと思えます。そのように考えたとき、子どもの気持ちの流れに付き合

う保育者の存在と、子ども自身がゆっくりと過ごせる時間とが、子どもの心身の育ちを支えるものとして非常に大切であるということに気付かされます。

何が人を穏やかにするのかと考えたとき、それはおとなも同じなのかも知れません。

(元・お茶の水女子大学附属幼稚園)

